

## 玉鬘系後記挿入説の否定（下）

村 井 順

三、「帚木」が後記挿入であるなら、作者は頭中將の官位昇進を、読者に説明したであろう。

源氏の親友頭中將が、始めて「帚木」に登場する時、作者は次のように叙べている。

……御むすこの君達、ただこの御宿直所の宮仕へを勤め給ふ。宮腹の中將は、なかに親しくなれ聞え給ひて、遊びたはぶれをも、人よりは心安く、馴れ／＼しく振舞ひたり。

ここで「宮腹の中將」といっているのは、一般に、「頭中將」と呼ばれている人物だが、まだここでは、彼が藏人頭を兼任していることは、読者にわからない。ところが同じ「帚木」を少し読み進んで行くと、

式部が所にぞ気色あることはあらむ。少しづつ語り申せと責めらる。下が下の中には、なでふことの聞し召し所侍らむといへど、頭の君、まめやかにおそしと責め給へば……

とあって、ここで始めて、「宮腹の中將」は、また「頭の君」すなわち、藏人頭であることが理解出来る。更に「夕顔」へ行くと、次の叙述に出合う。

一日前追ひて渡る車の侍りしを、のぞきて、わらはべの急ぎて、右近の君こそ、まづ物見給へ。中將殿こそ、これより渡り給ひぬれといへば、またよろしき大人出で来て、あなかも、と手かくものから、いかでさは知るぞ、いで、見むとてはひ渡る。打橋だつものを道にてなむかよひ侍る。急ぎ来る者は、衣の裾を物に引きかけて、よろほひ倒れて、橋よりも落ちぬべければ、いで、この葛城の神こそ、さかしうしおきたれとむつがりて、物のぞきの心もさめぬめり。君は御直衣姿にて、御隨身どももありし。なにがし、くれがしと数へしは、頭中將の隨身、その小舎人童をなむしるしにいひ侍りしなど聞ゆれば……

ここで読者は、「中將殿」が、「頭中將」であることを、疑いなく知ることが出来る。

この頭中將は、「紅葉賀」へ行くと、正四位下となっている。

従つてそれまで、彼は從四位上であつたのである。すなわち、

その夜、源氏の中將、正三位し給ふ。頭中將正下の加階し給ふ。

「葵」を読むと、正四位下の頭中將は三位になっている。

御法事など過ぎぬれど、正日<sup>しよどち</sup>までなほ籠りおはす。ならはぬ御つれづれを心苦しがり給ひて、三位の中將は、常に参り給ひつ……

ここでは作者は、頭中將が三位になったことを説明しないで、突然「三位の中將」という言葉を用いることによって、それを示している。けれども、「葵」では、源氏はすでに大將であるから、読者は源氏とまちがえるようなことはない。

「須磨」では、頭中將は宰相になっている。

いとつれづれなるに、大殿の三位の中將は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ……

「落標」では、彼は権中納言である。

……御子供など、沈むやうにものし給へるを、皆浮び給ふ。とりわきて宰相の中將、権中納言になり給ふ。

「薄雲」では彼は、大納言兼右大將である。

権中納言、大納言になりて、右大將かけ給へるを……

「少女」では彼は内大臣になっている。

おとど太政大臣にあがり給ひて、大將、内大臣になり給ひぬ。そして、「藤裏葉」では彼は、太政大臣になっている。

内大臣、あがり給ひて、宰相の中將（霧夕筆者）中納言になり給ひぬ。

ここで、「内大臣、あがり給ひて」というのは、内大臣が太政大臣となったことをいっているのである。以後彼は「藤裏葉」で、「おほきおとど」と呼ばれている。

このように、源氏物語では、この頭中將の官位昇進について、作者は注意を払つて叙べている。ただ第七卷の「紅葉賀」で、正四位下となったと叙べておきながら、第九卷の「葵」で、突然「三位の中將は」と叙べているが、これは位の相違だけで、官には関係がないから、粗略に扱つたのであろう。その他の点では、「大殿の三位の中將は、今は宰相になりて」（須磨）、「宰相の中將、権中納言になり給ふ」（落標）、「権中納言、大納言になりて、右大將かけ給へるを」（薄雲）、「大將、内大臣になり給ひぬ」（少女）、「内大臣、あがり給ひて」（藤裏葉）というふうに、頭中將の官の昇進は、順を追つて、読者に報告している。

ところが作者は、「桐壺」では頭中將を、

御子ども、あまた腹々にものし給ふ。宮の御腹は、藏人の少將にて、いと若うをかしきを……

と叙べておきながら、次の「帚木」では、前に述べた如く、

「宮腹の中將は」と、すでに彼は中將に昇進している、

これは「藤裏葉」まで書いていた作者の、とるべき創作態度ではないと思うが、どうであらう。見て来たように、作者は「須磨」・「落標」・「薄雲」・「藤裏葉」と、頭中將の官の昇進には、注意を払つて筆を執つて来ている。もしも「藤裏葉」につづいて、作者が「帚木」を書いたとしたら、必ずや、「宮腹の少將、今は中將になり給ひて」と、一筆書き添える労力を、惜しまなか

ったはずである。それがこのように、「桐壺」で、「宮の御腹は、藏人の少将にて」といいたがら、次の「帚木」で、「宮腹の中将は」といっているのは、やはり「帚木」は、「藤裏葉」執筆後に書かれたものではなく、「桐壺」の次に書かれたものであることを、物語っているものだと思う。

この頭中将の官についての、無雑作な取り扱いだけを見ても、筆者には、いかにも「帚木」の巻は、物語執筆について、初心者らしい態度がうかがえるのであって、到底「帚木」の巻後記説には賛成出来ないのである。

またすでに見て来たように、「帚木」では、この頭中将を、「中将」と呼んでいることが非常に多く、雨夜の品定の終り近くで、一か所何の説明もなく、「頭の君」と呼んでいる。これも、「桐壺」で、「宮の御腹は、藏人の少将にて」といっておきながら、ここで突然藏人頭に昇進させているのであって、この創作態度も、まことに物語執筆の初心者らしく、筆者は決して「藤裏葉」まで書き終った作者の、とるべき創作態度とは信ずることが出来ない。

#### 四、玉鬘系を何の必要あって挿入したもの

か、その理由が明かでない

玉鬘系後記挿入説となえる者は、前にも述べたように、紫上系の十七帖を書き終え、そのあとで玉鬘系十六帖を挿入したものだといっている。ところが玉鬘系十六帖は、一括して紫上系の中へ挿入されたのではなく、「桐壺」の後へ、「帚木」・「空蟬」・

「夕顔」の三帖が挿入され、「若紫」の後へ、「末摘花」が挿入され、「落標」の後へ、「蓬生」・「関屋」の二帖が挿入され、「少女」の後へ、「玉鬘」・「初音」・「胡蝶」・「螢」・「常夏」・「篝火」・「野分」・「行幸」・「藤袴」・「真木柱」の十帖が挿入されたというのである。

このようにいわれると、筆者は何のために、作者はどのような労苦をしたものかと、尋ねないではいられない。玉鬘系十六帖を、一括挿入するのなら、まだ比較的容易なことである。だが十六帖を、このように幾つにも分け、あちらこちらに挿入するといふことは、作者にとって、一通りならぬ苦心であり、煩わしさでなくてはならない。いったい、玉鬘系後記説となえる人々は、このことについて考えてみたことがあるだろうか？

そして紫式部が、もしこれを行なったとすると、それは「桐壺」と若紫の間に、筋の上で不自然があるから、「帚木」・「空蟬」・「夕顔」の三帖を、その間に挿入したのではなくてはならない。また「若紫」と「花宴」の間に筋の上に甚しい破綻があるから、「末摘花」が挿入されたのではなくてはならぬ。同じようなことが、「落標」と「絵合」、「少女」と「梅枝」の間に対しても、いわれなければならない。

ところが玉鬘系後記説となえる武田宗俊氏は、その著「源氏物語の研究」において、「紫上系の物語は玉鬘系の物語とは独立し、完全な統一を持つものとして、後者に無関係である。即ち源氏物語第一部から玉鬘系十六帖をのぞいても何等かける所のない物語となっている」(二頁)といっておられる。これによると、紫式

部という作家は、紫上系の物語にとって、全く不必要な、いや、むしろ反って邪魔になる玉鬘系物語というのを、苦心して挿入したことになる。何という愚かなことをしたものだ。挿入の必要があつて、やむなく作者がそれを行なつたというのなら、まだ話はわかる。ところが紫上系の物語は、それだけで「完全な統一を持つ」ものといひ、紫上系の物語は玉鬘系の物語と、「無関係である」といわれているのだ。そうだとすると、玉鬘系挿入は、全く不必要な無益な努力ではないか。無益どころか、反って作の効果を破壊し、妨害するものである。そういうものを、後から十六帖も書いて、前の巻へ廻り、しかも一か所へでなく、あちらこちらに挿入するということは、氣違い沙汰ではないか。賢明な源氏物語の作者が、そのようなことを實際に行なつたであらうか？ 所詮玉鬘系後記説は、その挿入の目的に必然性がなく、これが明白に説明されないかぎり、筆者には、ただ滑稽な説としか思われな。なるほど、玉鬘系後記説にも、それが主張されるからには、多少の根拠はあるだろう。けれども今いうように、後記挿入の必然性がハッキリ説明されないかぎり、筆者には、玉鬘系後記説の論拠は、偶然的現象をとらえて、問題にしているに過ぎないとし、考えることが出来ないものである。

五、「若紫」の構想が、「夕顔」の構想に似ているのは、「夕顔」執筆の後で、「若紫」を書いたからである。

源氏物語には、同型の構想という現象が、しばしば現われる。

そしてこの「若紫」の巻には、「夕顔」の構想に似たものが、相当多く見出される。このことについては、既に筆者は、「源氏物語評論」（九三頁）の中で、述べているものもあるが、今改めて数えあげてみた。

## イ

「夕顔」では源氏は大式乳母の病氣見舞に行つた外出先で、「御車もいたうやつし給はず、誰とか知らむと打解け給ひて、少しさしのぞき」、そして夕顔の花を発見して、一枝手折らせた。その時彼は偶然隣家から扇をもらつた。それから彼は、扇の送り主に、猥奇的興味を覚え始め、苦心の末、彼女を我が物とする。

「若紫」では、源氏は、「わらはやみ」の治療に、北山へいったが、その時も彼は「しのびてものせむ」とか、「誰とも知らせ給はず、いといたうやつれ給へれど」とある如く、身分を隠してゐて、僧庵の近くで偶然、遂げえぬ恋人藤壺に似た、美しい少女を発見した。それから彼は、その少女に猥奇的興味を覚え始め、苦心の末、彼女を我が物とする。

## ロ

「夕顔」の巻頭には、大式乳母といわれた老女が重病に罹り、尼となつて登場する。従つて巻頭には陰鬱な氣分が漂つてゐる。源氏がこの尼を見舞に行くと、尼君は起き上つて、

惜しげなき身なれど、捨て難く思ひ給へつることは、ただか

く御前にさぶらひ、御覽ぜらるることの、変り侍りなむことを、口惜しう思ひ給へたゆたひしかど、いむことのしるしに蘇りてなむ、かく渡りおはしますを見給ひ侍りぬれば、今なむ阿弥陀仏の御光も、心清く待たれ侍るべきなどといって、弱げに泣くのであった。

「若紫」の巻頭には紫上の祖母にあたる老尼が登場する。源氏がその庵室を垣間見ていると、尼君は飼っていた雀が逃げたといつて、泣いている幼い紫上をたしなめて、

いで、あなをさなや。いふかひなうものし給ふかな。おのがかく今日明日になりぬる命をば、何とも思したらで、雀暴ひ給ふほどよ。罪得ることぞと、常に聞ゆるを、心うく。などといっている。

「夕顔」において、源氏は夕顔から、「心あてにそれかとぞ見る」という歌を送られ、不審に思ひ、惟光に隣家のことを尋ねた。けれども惟光の答えは、「この五六日ここに侍れど、病者のことを思ひ給へつかひ侍るほどに、隣のことはえ聞き侍らず」というのだった。そこで源氏は惟光をして、家人に尋ねさせたが、やはり詳しいことはわからなかった。

それからしばらくして、惟光は源氏に隣の様子を報告しているが、やはり女の素姓は明かにならない。その時惟光は、「昨日、夕陽残りなくさし入りて侍りしに、文書くとてゐて侍りし人の、

顔こそいとよく侍りしか。物思へるけはひして、ある人ども、忍びて打泣くさまなどなむしるく見え侍る」などというもののだから、源氏の興味は一層かき立てられるばかりである。

その後また、惟光は隣家の様子の報告に来るが、「その人とは、更に思ひより侍らず」といっている通り、彼女の素姓は依然として明かでない。けれども素姓の不明のまま、源氏は彼女を我が物とする。そして夕顔の素姓は彼女の死後、右近の口から始めて明かにされている。

「若紫」においても、北山で源氏が可憐な少女を発見した時、彼は、「さても、いとうつくしかりつるちごかな。何人ならむ」と考えている如く、少女の素姓は明かでない。

源氏が僧都に会った時も、尋ねることはまずこのことである。すなわち彼は、「ここにもものし給ふは誰にか。尋ね聞えまほしき夢を見給へしかな。今日なむ思ひ合はせつる」と、夢にかずけて尋ねている。僧都は、それは故按察大納言の北方で、今は尼となっているものが、病氣のため来ているのだと答える。すると源氏は、少女はその尼君の娘だと思ひ、「かの大納言のみむすめものし給ふと聞き給へしは、すぎずきしき方にはあらで、まめやかに聞ゆるなり」と、あて推量でいってみる。だが源氏の推量はあたらす、尼君の娘は、十余年前に亡くなつていて、この少女は、実は亡くなったその娘と兵部卿宮との間に出来た忘れ形見であることを知るのである。

夕顔の身の上を考えてみると、父は三位中将であつたが、両親とも早くなくなっている。その後源氏の親友頭中将が、まだ少将であつた時、夕顔を見初めて、三年間はかりは、愛情深く通つて、女の子（玉鬘）まで出来たが、それが頭中将の本妻に知れて、本妻の里である右大臣家から夕顔はひどい脅迫を受けた。そこで彼女は、西の京の乳母の家に身を隠したのであるが、そこが余りに貧しい暮しであつたので、山里に移ろうとした。ところがその方角が今年は塞がつていたので、方違のため、一時五条の家に身を寄せている時、源氏との交渉が出来たのである。

紫上の母の身の上を考えてみると、父は按察大納言であつたが、すでに故人で、母の尼が養っているうちに、兵部卿宮がこっそり通ひ始め、女の子（紫上）まで出来たのだが、北の方の身分が貴かったので、嫉妬・迫害などの心配事が多く、物を思いつづけてなくなつてしまつたのである。つまり頭中将の愛妾が夕顔であり、兵部卿宮の愛妾が紫上の母である。従つて紫上にあたるものが玉鬘である。後年玉鬘が富貴の生活を送るようになるのは、当時の現実とは余りに相違したもので不自然の感を免がれないが、しかし彼女が紫上と、同型の構想によつて描かれている人物であることを思うと、なるほどと思われるのである。

## ホ

「夕顔」では、源氏が夕顔の所へ通うようになって、女をさして、その人と尋ね出で給はねば、我も名乗りをし給はで、いとわりなうやつれ給ひつつ、例ならずおりたちありき給ふは」とあ

る如く、源氏は身分を秘密にしている。そのために、女の方は、「いとあやしく、心えぬ心地のみして」、何とかして、男の素姓を知ろうと思ひ、男から来た使者の後をつきせたりしたが、わからなかつた。夕顔が自分の恋人を、源氏と気づいたのは某院へ連れて来られて、「預りいみじくけいめいしありくけしきに、この御有様知りはてぬ」とある如く、この院の番人が、ひどくつしみるやまつている態度で、始めて源氏と知つたようだ。

「若紫」でも、源氏が北山の聖に病氣の加持を受けにいつた時は、誰とも素姓を知らせず、身をやつして行つたのである。けれどもここでは、「夕顔」の場合とちがつて、源氏であることは、すぐ発見されてしまつてゐる。すなわち——誰とも知らせ給はず、いといたうやつれ給へれど、しるき御さまなれば、あなかしこや、一日召し侍りしにや、おはしますらむ。今はこの世のことを、思ひ給へねば、駿方うづまかたの行なひも捨て忘れて侍るを、いかでかかうおはしましつらむと、驚き騒ぎ、打笑みつつ見奉る。

## へ

ホで述べように、「夕顔」では、源氏は自分の素姓を隠していた。いや、そればかりでなく、源氏は、「御装束をも、やつれたる狩の御衣ぎを奉り、さまを変へ、顔をもほの見せ給はず」という姿で、夕顔を尋ねている。だから夕顔の方では、源氏の素姓がわからなかつたばかりでなく、源氏の愛情にも疑いを抱いていた。源氏が二条院へ行こうと誘つた時、夕顔は、「なほ怪しう、かく宣へど、よつかぬ御もてなしなれば、物恐しくこそあれ」と答えて

いる。源氏が夕顔を某院へともなおうとした時、彼女は、「山の端の心も知らで行く月はうはの空にて影や絶えなむ」と詠んでいる。彼女にはやはり源氏の心が、よくわからなかったのだ。

「若紫」の人々もまた、源氏が紫上を得たいと望む心中が、よくわかっていない。「あな、今めかし。この君やよづいたるほどにおはするとぞ思すらむ」——これは北山で源氏が、「初草の若葉のうへを見つるより」の歌を送った時、尼君のいった言葉である。尼君は源氏が、「ひがごと聞き給へるならむ」と思っているのだ。だから彼女は源氏に対して、「聞しめしひがめたることなどや待らむと、つつましうなむ」と答へている。

北山から帰京後、更に源氏は惟光を使者として、自分の心中を尼君に伝えさせた。その時も、「いとわりなき御ほどを、いかに思すにか」と、尼君も僧都も思っている。その他少納言という女房が惟光に語っている言葉にも、「ありへてのちや、さるべき御宿世のがれ聞え給はぬやうもあらむ。ただ今はかけても、いとにげなき御ことと見奉るを、怪しう思し宣はするも、いかなる御心にか、思ひよる方なう乱れ侍る」というのが見出せる。

ト  
「夕顔」で源氏の恋の仲立をするのは惟光である。五条の乳母を見舞いにいって、隣の見知らぬ女から和歌を送られた時、源氏は惟光に、「この西なる家には、何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」と尋ねている。そして惟光が病人のことにまかけていて、隣のこととはよく知らないと言えと、源氏は彼に、隣家の様子を調べ

ように命じた。それから惟光の苦心の調査が開始される。「惟光いささかのことも、御心にたがはじと思ふに」とあるように、彼は源氏の最も忠実な、そして源氏に最も信頼されている家臣である。その信頼に答えて、彼は間もなく源氏を夕顔のもとに通わせることに成功した。

夕顔が変死した時も、源氏がまず求めたのは惟光である。まことに彼は、「夜中、暁といはず、御心に従へる者」である。彼は夕顔の亡骸の搬出から、読経・火葬・忌明けの法会のことまで、一切秘密のうちに処理している。

「若紫」でも惟光は源氏の腹心として活躍している。春の末に、源氏は北山で病氣の加持を受けたが、その加時め彼は、「人々は帰し給ひて、惟光ばかり御供にて」散策に出て、秘めたる恋人によく似た紫上を発見するのである。北山から帰京しても、源氏は幼い紫上の姿が忘れられず、文を送るが、使者はやはり惟光である。秋の末に、源氏は六条京極のあたりへ訪れようとして行くと、途中で、「例の御供に離れぬ惟光」が、荒れたる家の、木立とものふりて、木暗う見えたる」邸を、ここが紫上のいる所だと教えた。そこで源氏はすぐその邸を訪れている。

紫上の父兵部卿宮が、明日紫上を迎えに来る予定であること、を、源氏に報告した者も、やはり惟光である。そこで源氏は、その夜、「惟光ばかりを馬に乗せて」出かけて行って、むりやり紫上を二条院へ迎え取ってしまった。そして紫上を迎えた部屋は、使っていない対屋だったので、「惟光召して、御帳・御屏風など、あたりあたりしたてさせた」のであった。玉鬘後記説の人々

は、この惟光は「若紫」が初出の人物で、後に作者が「夕顔」を書いて、「若紫」の前に挿入する時、再びその名を用いたのだと、説いている。それならなぜ作者は、「帚木」にも、惟光の名を用いなかったのか。これについては既に前に述べたが、この点が説明つかないではないか。

## チ

「夕顔」の巻の、五条の夕顔の仮寓は、「げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、このもかのも、あやしうちよろほひで、むねむねしからぬ軒」とあり、また、暁方近くになると、隣の家々から、「あやしき賤の男」の声々が聞えて来るとあって、まことに貧しい家並の中であつた。けれども、それはどこまでも貧者の生活であつて、荒廃した環境というものではない。

ところが、夕顔が源氏につれられて来た某院は、貧しい住居ではないが、庭は、「いといたく荒れて、人目もなく遙々と見渡されて、木立いとうとましく、物ふりたり。け近き草木などは、殊に見所なく、皆秋の野らにて、池も水草に埋づもれたれば、いとけうとげになりける」所であつた。

「若紫」の紫上の住居も、貧しいものではないが、「荒れたる家の、木立いとうものふりて、木暗う見える」邸である。尼君の死後、源氏がそこへ訪れた時も、「いとすぐげに荒れたる所の、人ずくななるに、いかに幼き人、恐しからむと見ゆ」と、作者はいつており、「夜一夜、風吹き荒るるに、げにかうおはせざらましかば、いかに心細からまし。同じくは、よろしきほどにおはしま

さましかば」と、女房達のささめきあっている住居である。また此処へ兵部卿宮が訪れた時も、作者は、「年ごろよりもこよなう荒れまさり、広う物ふりたる所の、いと人ずくなに、寂しければ」と叙べている。

## リ

「夕顔」における、源氏と夕顔との恋は、五条の乳母の病氣見舞に行つて、偶然生まれたものであるが、源氏は彼女にひどく心を惹かれ、「追ひ惑はして、なのめに思ひなしつべくは、ただかばかりのすさびにても過ぎぬべきことを、更にさて過ぐしてむと思されず、人目を思して、へだておき給ふ夜な夜などは、いと忍び難く、苦しきまで」に思つた。それで彼は、「なほ誰となく、二条院に迎へてむ。もし聞えありて、びんなかるべきことなりとも、さるべきにこそは」と決心するに至り、夕顔に対して、「いさ、いと心安き所にて、のどかに聞えむ」といつている。此処で彼が、「いと心安き所」といつているのは、勿論二条院を意味している。

けれども源氏のこの考えは、「夕顔」では実際には実現されず、彼女のはかない生命は、某院で絶えはてている。

「若紫」においても、源氏が病氣加持に北山へ行つて、偶然生まれた恋ではあるが、しかし彼は紫上に、ひどく心を惹かれて、二条院へ迎えようと思つた。彼は幼い紫上に、「いさ給へよ。をかき絵など多く、ひひな遊びなどする所に」といつている。作者もまた源氏の心中を伝えて、「あはれに思しやらるれど、さて通



ひ給はむも、さすがにすずなる心地して、軽々しう、もてひがめたることと、人もやもり聞かむなど、つましければ、ただ迎へてむと思はず」と叙べている。此処で源氏が、「ただ迎へてむ」と思った、その場所は、勿論二条院を意味している。

そして夕顔は二条院へ迎ええられることは、果されなかったが、「若紫」では、実際に源氏は紫上を二条院へ伴っている。

又

「夕顔」では、夕顔が源氏に某院へ連れ出されたのは、彼女が山里へ移ろうとしている時であった。夕顔の死後、右近が源氏に語った話を紹介すると、次のようである——頭中将、まだ少将にものし給ひし時、見初め奉らせ給ひて、三年ばかりは、心ざしあるさまに通ひ給ひしを、こぞの秋の頃、かの右大臣殿より、いと恐しきことの聞えまうで来しに、物おちをわりなくし給ひし御心に、せむかたなう思しおちて、西の京に、御乳母の住み侍る所になむはひ隠れ給へりし、それもと見苦しきに、住みわび給ひて、山里にうつろひなむと思したりしを、今年よりはふたがりたる方に侍りければ、たがふとて、あやしき所にもものし給ひしを、見あらはされ奉りぬること、思し歎くめりし。

「若紫」では、紫上が源氏に二条院へ連れ出されたのは、彼女が父兵部卿宮邸へ移ろうとしている時であった。兵部卿宮は紫上の邸へ来て、「かかる所には、いかでかしはしも幼き人の過ぐし給はむ。なほかしこに渡し奉りてむ。何の所せきほどにもあらず。乳母は曹司などして侍ひなむ。君は若き人々などあれば、も

ろともに遊びていとうものし給ひなむ」といっており、帰る時にも、「いとかう思ひな入り給ひそ。今日明日渡し奉らむ」といっている。

また源氏の使いで惟光が紫上の邸を訪ずれると、女房は、「宮より、明日俄かに御迎へにと宣はせたりつれば、心あわただしくてなむ」と答えている。

ル

「夕顔」では、源氏が夕顔を某院へ連れていった時、「軽らかに打乗せ給へれば、右近ぞ乗りける」とある如く、右近がただ一人、夕顔に付添って、車に乗っていった。

そして某院では、宿守が、源氏の従者が少いので、「御供に人も侍らはざりけり。ふびんなるわざかな」と言い、「さるべき人召すべきにや」などと、人をして言わせると、源氏は、「殊更に人來まじき隠れ家求めたるなり。更に心より外にもらすな」といっている。また、「別納<sup>わかづ</sup>の方<sup>かた</sup>にぞ、曹司などして人住むべかめれど、こなたは離れたり」という叙述もある。このように、この某院は、宿守の外には、人がおらず、使用されていない邸である。

「若紫」では、源氏が紫上を二条院へ連れていく時、「少納言、とどめ聞えむ方なければ、よべ縫ひし御衣ども引きさげて、みづからもよろしき衣着換へて乗りぬ」とある如く、少納言がただ一人、紫上に付添って、車に乗っていった。

そして連れて行かれた所は、二条院の中の、「こなたは住み給はぬ対なれば、御帳などもなかりけり」とある如く、やはり使用

されてない場所である。それで源氏は惟光を呼んで、帳台や屏風などを立てさせ、几帳のかたびらをおろさせ、東対に宿直物を取らせにやっている。

ヲ

「夕顔」では、夕顔が変死したためでもあるが、五条の家の者達には、行方を秘密にしている。惟光が源氏に報告している言葉に、「かの古里に告げやらむと申せど、しばし思ひ静めよ。事のさま思ひめぐらしてとなむ、こしらへおき侍りつる」というのがある。すなわち右近が夕顔の死を、五条の家に知らせようというのを、惟光はやめさせたというのである。従って五条の宿では、夕顔の行方がわからないので、途方に暮れている——かの夕顔の宿には、いづ方にと思ひ惑へど、そのままにえ尋ね聞えず、右近だに首つれねば、あやしと思ひ歎きあへり。たしかならねど、けはひをさばかりにやとささめきしかば、惟光をかちけれど、いとかけ離れ、けしきなくいひなして、なほ同じごと、すぎありきければ、いとど夢の心地して、もし受領の子供のすぎずきしが、頭の君におち聞えて、やがてあてくだりけるにやとぞ思ひよりける。

「若紫」では、紫上の邸の人々は、その行方をよく知っていた。けれども、「しばし人に知らせじと君も宣ひ、少納言も思ふことなれば、せちに口がためやりつつ」とある如く、源氏の指図のままに、父兵部卿官には、「ただ行方も知らず、少納言がゐて隠し聞えたる」といっていた。従って宮は残念に思つて、故尼君もか

しこに渡り給はむことを、いとものしと思したりしことなれば、乳母いとさし過ぐしたる心ばせのあまり、おいらかに渡さむをびんなしなどはいはで、心に任せてゐてはふらかしつるなめりといつて、泣く／＼帰つていったのである。

ワ

「夕顔」では、源氏は夕顔との恋愛の中で、「帚木」の雨夜の品定を回顧している。すなわち、

イ、かのしもがしもと、思ひ捨てし住居なれど、その中にも、思ひの外に口惜しからぬを見つけたらばと、めづらしう思はすなりけり。

ロ、かやうの並々までは思ほしからざりつるを、ありし雨夜の品定の後、いぶかしく思ほしなる品々のあるに、いとどくまくなりぬる御心なめりかし。

ハ、げにこれぞなのめならぬかたはなめると、馬頭のいさめ思し出でて、いとほしきに、

ニ、これこそ、かの人の定めあなづりし、しもの品ならめ。その中に、思ひの外にをかしきこともあらばなど、思ほすなりけり。

右のうちで、ロとハは夕顔との恋愛中に、品定を回顧したものでなく、空蟬のことを思つていて、回顧しているものである。

「若紫」でも、源氏は紫上との恋愛の中で、「帚木」の雨夜の品定を回顧している。すなわち、

あはれる人を見つるかな。かかればこのすき者どもは、か

かるありきをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり。たまさかに立出づるだに、かく思ひの外なることを見るよと、をかしう思す。

もし作者が、「若紫」を執筆している際に、まだ「帚木」・「空蟬」・「夕顔」の三帖が書かれていなかったならば、「若紫」のこの回顧は不自然ではないか。このようにいうと、玉鬘系後記説となえるものは、「これは雨夜の品定の回顧ではない」というであらう。けれどもそれは、ゆがんだ心でこの物語を読むからであって、「あはれる人を見つるかな。かかれればこのすき者どもは、かかるありきをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり。云々」という驚歎・驚喜は、雨夜の品定の回顧と考えるより外に、考えようのないものである。試みに、「源氏物語抄」(「細巴抄」ともいう)を見てみると、「このすきもの」の註に、「品定の夜の人々をいへり」といっている。古人もやはりこのように考えているのである。

殊に「夕顔」と「若紫」との間には、あげて来たように、同型の構想が沢山ある。その上、雨夜の品定の回想は、「夕顔」には、イ・ロ・ハ・ニと四度もある。(外に頭中将の常夏の話の回想している所もあるが、数えなかった)「若紫」が「夕顔」の次に書かれたものなら、当然こは雨夜の品定の回顧と考えるべきものだ、筆者は主張するものである。

もしもその反対、すなわち「帚木」が「若紫」より遙か後に書かれたものなら、帚上を発見した時の、源氏のこの驚歎・驚喜を、何と解釈するか? 「このすきものども」は、誰を指すもの

といえよう?

ここで横道へそれるが、島津久基博士の「源氏物語 卷四 若紫」(昭和十五年第一刷)の「釈評」を、長いけれども引いてみよう。

病の療養を目的の北山の逍遙が、偶然にも望外の驚異的な収穫を齎した体験を顧みて、

斯かれば此のすき者共は、斯かる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり。たまさかに立ち出づるだに……。

と源氏が歎じたのは、評釈に「源氏物語評釈」萩原広道著(筆者)に

これ帚木の照応を、此の巻に移して引ききたる脉也。心をつくべし。

と説いた通り、源氏の心中には、かの雨夜の品定に、馬頭が葎の宿から天女を拾ひ出す御伽噺めいた話を得々と語った折には、半信半疑であったそれが、今や的確の現実として思ひ当られて来たのである。此の疑問を解く為の狐奇趣味が即ち空蟬に趨らせ、夕顔に赴かせ、更に又末摘花に興味を感じさせ、而もいづれも期待した程満足を得ずに終った。今此の北山の若紫のみは、全く十二分以上の成果であった。流石に斯道の大家馬頭、我を誂かずと、当夜が回想されるに違ひない。

但し「此の」とあるから、馬頭或は其の類の者といふだけでなく、現に従臣の惟光等をもおのづから含んでゐると観てよいのであらう。(五七・五八頁)

次に五十嵐力博士の、「昭和完訳 源氏物語第一巻」（昭和二十三年発行）の、この口語訳を掲げてみよう。

可愛い人を見たことではある。かういふ事があればこそ、あの好色家の品定め（しんぎめ）の者どもが、あの様な女人（おんな）あさりの遊行（ぎやうぎん）ばかりをして、よく然るべからざる人をも見つけるのであった。たまさかに出かけてさへ、この通り意外の拾ひ物をするのだからな。（二三頁）

次に岡一男博士の「源氏物語」（昭和二十八年初版）の、「この好き者どもは」の語釈を見てみると、「あの好色男たちは。雨夜の品定の左馬頭たち」（四七頁）となっており、「鑑賞」を見ると、

なお「このすきものども」を、惟光・良清と解する説があるが、彼等がこういう好色（おしや）ありきばかりして、意外な拾ひ物をしたという話は、どこにもないから、やはりあの雨夜の品定の馬頭たちの話を思い出したとすべきである。（四八頁）

といっておられる。このように、島津・五十嵐・岡の三博士は、「このすき者ども」を「品定の夜の人々」（島津博士はこれに惟光等を加えてよいとおられる）を指すものとしておられる。

ところが最近の著述は、「このすき者ども」を、惟光・良清と見ているから驚く。日本古典文学大系の「源氏物語 一」（昭和三十三年一月第刷）は、「あはれなる人を見つけるかな。云々」の註で、次のようにいっている。

可愛い女（紫土）を見たのであるよ、かよう（こんな風）に美人を見つめるから、自分のお供をしているこれらの好色者たちは、こんな忍び歩きばかりして、見つけそうもない

（見つける事があろうとも思わない——意外な）美人をも、うまく見つけるのだっけなあ。（二八六～七頁）

ここでは「惟光・良清」という語は使われていない。けれども「自分のお供をしているこれらの好色者たち」という説明は、彼等兩人を指していると見るより、外に考え方はない。

松尾聰博士の「全釈源氏物語 巻二」（昭和三十四年二月発行）も、やはり「惟光・良清」説をとっている。すなわち、「このすき者ども」の註で、次のようにいっておられる。

「この」は惟光・良清などを指すと解しておく。惟光・良清などに、前にそのような事実があったものとして作者は記しているのである。物語製作の一つの技巧であろうか、これを正面からうけとって、この巻以前に散佚巻があつて、その事実が、そこで述べられていたと解く説もでてくる。又、「この」を一般に好色者をさすとする考もある。（三三頁）

問題はどうか「この」の考え方にあるらしい。「この」の「こ」は指示代名詞近称だから、近くの者をさす。だから惟光・良清をさすという考え方ののだ。島津博士にもこの考え方がうかがえる。博士のように「從臣の惟光等をもおのづから含んでいる」と考えると、良清も当然含むこととなる。けれどもそれがいけないのだ。なるほど雨夜の品定は、「若紫」から三巻前の「帚木」の事である。けれども我々は作者が、すぐ前の「夕顔」で、四度も雨夜の品定を回顧していることを忘れてはいけない、しかも作者は、「夕顔」につづいて、直ちに若紫を執筆しているにちがいないのだ。だから「若紫」を書いていても、「夕顔」の印象は鮮明

である。従つて作者の心中では、雨夜の品定は、「かの」ではなくて、「この」なのである。このように見て来ると、古典文学の研究は、まず解釈にありということが考えられる。否、解釈はまず鑑賞力、享受力にありということが痛感せられる。

思わぬ横道へそれたが、この外にも「夕顔」と「若紫」に共通した構想は数えられる。例えば、両巻とも源氏と葵上との関係（「夕顔」には僅かである）が叙べてあること。両巻とも藤壺との恋が叙べてあること。両巻とも六条御息所との恋が叙べてあることなどである。「夕顔」と「若紫」とでは、主題はまるでちがうし、事件の結末も全く相違している。にもかかわらず、この両巻の間に構想の類似が、このように数えられるのは、どうしてであるう。しかもこれは模倣では勿論ない。筆者は、これは、今いったように、作者が「夕顔」を書いて、その印象がまだ強く頭の中に潜在している時、「若紫」を執筆したためだと思う。もしもその反対、すなわち玉鬘系後記説であるならば、作者が「若紫」から「藤裏葉」までの十六帖を書きあげ、それから更に「帚木」を書き、「空蟬」を書き、そのあとで「夕顔」を書いたとしたら、これほどまでに、「夕顔」・「若紫」の両巻の構想が共通するわけがないではないか。

## 六、「夕顔」の巻から「若紫」の巻への接

続は不自然ではない

ここでは「夕顔」の巻から「若紫」の巻への接続は不自然である（武田宗俊氏「源氏物語の研究」二二三頁）という説を否定したいと思う。

「夕顔」においては、夕顔は某院へ源氏につれて行かれ、そこでもののけのために取殺されるのであるが、その本文を掲げてみよう。

宵過ぐるほどに、少し寝入り給へるに、御枕上に、いとをかしげなる女あて、おのがいとめでたしと見奉るをば、尋ねも思はさで、かくことなることなき人をあて、ておはして、時めかし給ふこそ、いとめざましくつらけれどとて、この御かたはらの人をかき起さんとすと見給ふ。ものにおそはる心地して、おどろき給へれば、火も消えにけり。

すなわちこれによると、源氏は夢に、もののけが夕顔をかき起そうとすると見たのである。そして傍にいた源氏自身も「ものにおそはるる心地して」目をさましたのである。こういふのであるから源氏自身も、この時多少はもののけに犯されたにちがいない。夕顔の寂しい野辺送りを秘かに見送り、二条院へ帰って来て寝ると、そのまま源氏はひどく苦しがり、二、三日たつても、身体は益々弱るようになっていった。帝もそれを聞いて大層お歎きになり、寺々で祈禱をさせ、まつり・板え・修法などを、いいようもなく種々させられた。左大臣の方でも、ひどく心配して、さまざまのことをせられたためか、源氏は、「二十余日いと重くわづらひ給へれど、ことなるなごり残らず、おこたりさまに見え給ふ」という状態になった。そして、「九月二十日のほどにぞ、おこたりはて給ひて、いといたる面瘦せ給へれど、なかなかいみじうなまめかしうて、ながめがちに、ねをのみ泣き給ふ。見奉りとがむる人もありて、御もののけなめりなどいふもあり」という叙

述もあるように、病氣を、源氏のもののけのせいだいという者もあったのである。当時の風習、当時の常識からいって、このような不慮のわざわいに会った者は、夕顔は勿論だが、源氏もまた、もののけに犯されているものと、考えたであらう。しかもまだもののけは完全に消え去ったのでない。夕顔の法事がすんでも、次のような事件が起っている。

君は夢にだに見ばやと思し渡るに、この法事し給ひて、またの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも、同じやうにて見えければ、荒れたりし所に住みけむもの、我に魅入れけむたよりに、かくなりぬることと思し出づるにも、ゆゆしくなむ。

「夕顔」では源氏はこのような有様である。これを読み終って、「若紫」を読むと、その巻頭に、「わらはやみにわづらひ給ひて、よろづにまじなひ、加持などせさせ給へど、しるしなくて、あまたたびおこり給うければ、云々」とある。すでに「夕顔」の源氏をよく知っている読者である。これを読んで不自然に思うであらうか。この「わらはやみ」のために、源氏は北山へ加持を受けに行くのであるが、病氣が癒ったようだからと、従者が帰京をすすめると、僧は、「御もののけなど加はれるさまにおはしませけるを、今宵はなほ静かに加持など参りて、出でさせ給へ」というから、彼はその言葉に従い、一泊した。

「夕顔」のもののけのことが、「若紫」で感ぜられるのは、この二か所だけである。或は「わらはやみ」はもののけのためのものではないという人があるかも知れない。それはこの北山のひじり

の言葉を信用しないもので、筆者の力では、そういう人々を説き伏せることは到底出来ない。

古人の考え方を見てみると、「岷江入楚」は、「わらはやみにわづらひ給ひて」の註で、三光院（三条西実条）の説として、「夕顔巻には、河原院にて、靈氣にあひ給ひし故也」といっている。また「源氏物語抄」は、「まじなひかち」の註で、「夕がほの以後物氣など云ゆゑ、まじなひかちなどにや」といっている。この言葉には疑問が入っている。「源氏物語評釈」の萩原広道も「このわらはやみ」を、「夕顔」のもののけとすることに疑問をはさんでいる。なるほど紫式部は、「わらはやみ」をもののけのためだとはっきりいっていない。見て来たように、ひじりをして、「御もののけなど加はれるさまにおはしませけるを、云々」と觀察させているだけである。けれども、当時の読者はこれだけで、そのもののけが何によるものであるかは、充分理解したであらうと思う。いや、たとえこのひじりの言葉がなくても、平安朝文学、殊に源氏物語を読んでいる。「わらはやみにわづらひ給ひて」とか、「よろづにまじなひ、加持などせさせ給へど、しるしなくて」とか、「あまたたびおこり給うければ」とかいった言葉に出会ったら、すぐもののけではあるまいかと、一応考えるらぐいの常識がなくては、この物語をほんとうに理解することは出来ない、筆者は考えるものである。

「夕顔」の書出しを見ると、「六条わたりの御忍びありきの頃、うちよりまで給ふ中宿りに、大貳の乳母いたくわづらひて、尼になりにける、とぶらはむとて五条なる家、尋ねておはしたり。」

とあるが、「六条わたりの御忍びありき」とは、誰との関係か、読者には少しもわからない。これこそ武田宗俊氏の言葉借りりと、「空蟬」の巻から「夕顔」の巻への接続の不自然さ！である。この点は「夕顔」から「若紫」への接続の不自然さ以上だと筆者は考える者だが、どうだろう。けれども、「夕顔」を読み進んで行くうちに、読者には未知だけれども、源氏の恋人が、「六条あたり」にあるということを知っていくのである。書出して何の説明もしない、この創作態度は、「若紫」で、源氏の「わらはやみ」が、何によるものか、説明しない態度と似ている。このことも、作者が「夕顔」を書いてから、それほど時日をおかないで「若紫」を書いただろうと、思わせるものではある。

「思へどもなほ飽かざりし夕顔の、露におくれしほどの心地を、年月ふれど、思し忘れず」という、「末摘花」の書き出しは、全く「夕顔」に直結するものである。しかもこの「末摘花」は、後記挿入の巻だといわれている。もしも「夕顔」とともに、「末摘花」が後記挿入であるならば、作者は「末摘花」をどうして「夕顔」のすぐ後に挿入しなかったのか？「夕顔」の次に「末摘花」をおいた方が、この書き出しからいっても穏やかであるし、「末摘花」の事件からいっても効果的である。それをあえて「若紫」の次へ後から挿入する！そんな愚かしいことを、賢明な紫式部がしたのであるか？しかも現在のように、「若紫」の後へ、「末摘花」を一巻だけ入れるということは、非常な苦心のいることだ。その上これも、武田氏の表現を借りると、「若紫」の巻から、「末摘花」の巻への接続の不自然さ！ということがいえるのである。

以上述べて来たところでは、筆者は決して、「夕顔」から「若紫」への接続を、不自然と思うものではない。これを不自然というなら、「空蟬」から「夕顔」への接続も不自然だし、「若紫」から「末摘花」への接続も不自然といわねばならない。現代小説の常識からいうと、「桐壺」の内容と、「帚木」の内容は、あまりにかけ離れている。だから「帚木」を中心に考えると、「桐壺」は異質のものと思われる。

「帚木」の空蟬物語は、「空蟬」へ展開して、空蟬・軒端萩物語となる。けれども「空蟬」の巻だけで、この空蟬・軒端萩物語は終って、「夕顔」では夕顔物語となっている。だが「夕顔」には、空蟬・軒端萩のことが時々叙べられているから、完全に空蟬・軒端萩物語が消滅したのではない。

ところが「若紫」には、前巻に起った印象的な事件である、夕顔の想い出は何も書いてないし、空蟬・軒端萩の記事も全くない。だから若紫は異質のものと思われる。

それに対して「末摘花」は冒頭から「夕顔」を受けているから、「帚木」・「空蟬」・「夕顔」・「末摘花」と直結すべきものである。以下「蓬生」・「関屋」、そして玉鬘十帖も、同様に空蟬物語であり、(軒端萩物語は消滅する)夕顔物語であり、末摘花物語であるから、一つに連結すべきものである——玉鬘系後記説を唱えるものは、このように考えているものだと、筆者には思われる。つまり現代小説の形式を、古典文学にあてはめて、物語はかくあったにちがいないと信ずるところから、玉鬘系後記説というものには生まれに過ぎないものだと思う。

だが前に述べたように、玉鬘系後記説では、作者は「末摘花」を何故「夕顔」に直結しなかったかが説明つかない。「夕顔」と「末摘花」とが、後記挿入ならば、この二帖を「若紫」の前と後とに入れないで、直結したはずである。この説明がつかないかぎり、筆者は「若紫」に、夕顔の回想がなく、空蟬・軒端萩の記事のないのは、他の理由によるものだと思う。すなわち、それを解決する鍵は、前に述べた作者の世界観！これによるものだと思う。すなわち、「帚木」・「空蟬」・「夕顔」は、け近き恋・肉の恋・行きずりの恋を描くのが、作者の目的であり、「若紫」は、け高き恋・あこがれの恋・かなわぬ恋を描くのが目的であった。だから「若紫」には、作者は意識して夕顔の回想や、空蟬・夕顔末摘花の記事を載せなかったのである。それを載せると主題の純一が犯され、雰囲気が破壊されると作者は考えたのである——筆者はこのように考えるものである。

筆者が不思議に思うことは、玉鬘系後記説論者は、どうして「花散里」を後記の中に加えないのかということである。「賢木」と「須磨」は、その間に事件の省略はあるが、直結すべき巻である。そしてその間に挟まれている「花散里」は、全く異質のもので、「賢木」から「須磨」への緊迫した空気を、破壊していることとの甚しい巻である。それは「夕顔」から「末摘花」へつづくべき雰囲気を、「若紫」が破壊しているのと、全く同様の現象である。けれども筆者は、やはりこの「花散里」は、作者が「賢木」から「須磨」への緊迫を破壊するため、故意に挿入したものだと思われるのである。そう考えるより外に、この「花散里」の巻の存在は、

説明の出来ないものである。そして「若紫」の巻が、「夕顔」と「末摘花」の間にある理由も、これと変らない意識的挿入だと思ふ。

### 七、「帚木」・「空蟬」・「夕顔」・「末摘花」 は、最初から今の所になければならぬ。

源氏は北山で、藤壺によく似た紫上を発見し、京へ帰ってから、文を尼君の所へ送るが、その時彼は惟光を呼んで、少納言の乳母によく話すようにと命じた。すると惟光は、「さもかからぬ限なき御心かな。さばかりいはいけなげなりしけはひを」と、源氏の風変りな好色に驚いている。惟光のこの感懐は、もし源氏物語が、「桐壺」から「若紫」へつづいていたとしたら、不自然なものではないか。これはやはり、「帚木」・「空蟬」・「夕顔」の事件を経て来ているからこそ、我々は惟光の感懐に共鳴するのである。これから考えても、「若紫」には、その前に「夕顔」が必要であり、また「空蟬」・「帚木」がなくてはならぬのである。

「若紫」における源氏と藤壺との恋も、「帚木」・「空蟬」・「夕顔」の三帖で、それが叙べてあるからこそ、我々は不自然に感じないのであって、これがもし、「桐壺」から直接「若紫」へ直結していたら、相当不自然に感ずるだろうと思う。

これよりももっとひどいのは、源氏と頭中将の関係である。これは「桐壺」で、

（左大臣は——筆者註）御子ども、あまた腹々にものし給ふ。  
宮の御腹は、藏人少将にて、いと若うをかしきを、右の大臣の御仲は、いとよからねど、え見過ぐし給はで、かしづき給



ふ四の君に、あはせ奉り、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになむ。

と、初めて読者に紹介される。そしてこの「桐壺」の次に「若紫」を書いたというのが、玉鬘系後記説論者の説であるが、その「若紫」では、頭中将は、源氏が病癒えて、北山から帰る時、迎えに來ている。すなわち、

御車に奉るほど、大殿より、「いづちともなくて、おはしましにけること」とて、御迎への人々、君達など、あまた参り給へり。頭中将・左中弁、さらぬ君達も慕ひ聞えて、「かやうの御供は、つかうまつり侍らむと、思ひ給ふるを、あさましく、おくらさせ給へること」と、恨み聞えて、「いといみじき花の蔭に、しばしもやすらはず、たち帰り侍らむは、あかぬわざかな」と宣ふ。岩がくれの苔の上になみあて、かはらけ参る。落ち来る水のさまなど、ゆゑある滝のもとなり。頭中将、ふところなりける笛取り出でて、吹きすましたり。弁君、扇はかなううち鳴らして、「とよらの寺の西なるや」とうたふ。人よりはことなる君達なるを、源氏君、いたくうち悩みて、岩に寄りゐ給へるは、たぐひなくゆゆしき御有様に、何事にも目移るまじかりける。

「若紫」で頭中将が顔を出すのは、僅かにこれだけである。ここでも頭中将は、それほど重い役は演じていいない。そして玉鬘系後記説だと、若紫の次は直ちに「紅葉賀」へ行くわけである。

「紅葉賀」では、頭中将は、巻頭で源氏とともに青海波を舞っているし、源氏が源内侍という老女と親しくしていると聞きつ

け、彼は、「まだ思ひよらざりけるよ」と思い、源氏より先に、源内侍に関係してしまっている。源氏物語では、頭中将が源氏の先を越すということは殆んどない。彼はいつでも源氏の引き立て役に廻っている。従つて源氏と事を争う場合は、いつでも彼は負け役である。ところが此処では彼は、源氏より先に、源内侍に語らいつている。これはどうしてであらう？

筆者の考えるところでは、これは「末摘花」の次に、「紅葉賀」が書かれているためだと思ふ。すなわち、彼は「末摘花」で、源氏と末摘花を争つて敗れている。それで作者は、次の「紅葉賀」では、珍しく、相手が老女であり、喜劇的役割でもあるので、頭中将に勝をゆづつたのだと思ふ。ところが玉鬘系後記説では、「紅葉賀」の書かれた時には、「末摘花」はまだ執筆されていないのである。そうだとすると、「紅葉賀」の執筆態度は、非常に源氏物語らしくないものであり、「紅葉賀」という巻は、極めて源氏物語らしくない巻だということになる。

その上頭中将は、源氏が源内侍と同衾中を発見するや、戯れに太刀を抜いておびやかし、大立廻りを演じている。これは今まで見て来た、「桐壺」や「若紫」に叙べられていただけの、僅かな頭中将の概念では不自然な、余りに源氏に親しみ過ぎた振舞である。これはどうしても、「常木」や「夕顔」、特に「末摘花」に、源氏が末摘花の琴を立聞いて帰ろうとすると、透垣の蔭にかくれている頭中将におびやかされるという事件があり、二人それはから、「おのおの契れる方にも、あまえてえ行き別れ給はず、一つ車に乗りて、月のをかしきほどに、雲かくれたる道のほど、笛吹

き合はせて、大殿におはしぬ」という親密さが描かれているからこそ、「紅葉賀」の大立廻りが滑稽味を増し、親しみを感ずるのであって、「未摘花」の書かれない前に、唐突としてこのような事件を、作者が書くわけではないのである。

そして「未摘花」における頭不将と源氏のこの親密は、「夕顔」における親密があるからである。すなわち夕顔の死にあって、傷心臥床中の源氏は、「大殿の君達参り給へど、頭中将ばかりを、立ちながらこなたに入り給へと宣ひて、御簾の内ながら宣ふ」とあるように頭中将だけは特別の親しさを示しているのである。そして「夕顔」における頭中将と源氏のこの親密は、また「帚木」における親密があるから妥当性を持つのである。すなわち、「宮腹の中将は、なかに親しく馴れ聞え給ひて、遊び戯れをも、人よりは心安く、馴れしく振舞ひたり」とあるように、源氏と頭中将は、「帚木」の昔から親しいのである。だから「帚木・空蟬・「夕顔」は、最初から今の場所にあつたと考えねばならないのである。

筆者の述べたいことは、まだ沢山あるけれども、余りに長くなるので、ひとまずこれで筆をおくこととする。なお、一つ言い残したが、「葵」の巻にある、「かのいざよひの、さやかなりし秋のこと」というのを、武田氏は、「源氏物語の研究」(六頁)で、問題にしておられるが、筆者は、この「秋」は「折」の誤写だと思う。行書では両者は極めて誤りやすい文字である。



「秋」となつた「折」の字。

「葵の巻」江戸時代写本(筆者架蔵)

